

## 三貨制度の本格的変容過程 その2

The real changed contents in the trio money standard system. Part-2.

三 上 隆 三  
Mikami, Ryuzou

### ABSTRACT

In order to open Japan to trade with the West, Perry, M.C. fleet came Japan. Between she and Japan, exchange-rate——1 Ryo=¥1=\$4 was realized for the time being. T.Harris revised this rate by Dohshu-Dohryo-Exchange principle. As a result, artificial gold rush broke out in Japan. Then that gold rush produced the last and most poor-looking gold coin-Manyen Koban.

### I 文化ショックと外交

嘉永6=1853年にアメリカの海軍軍人たるペリー M.C.Perry が軍艦4隻を率いて強引に江戸湾に入りこみ、江戸の鼻のさきの浦賀沖に碇泊して鎖国中の日本に開国を求めた。これらの軍艦は鉄板でおおわれていたので、木造船より知らなかった日本人はその色から黒船とよんだ。ただし日本の名誉のために一言すれば、軍事的天才の織田信長が石山本願寺攻めの時、本願寺に食糧等を搬入してサポートした毛利水軍を撃破するために、鉄板で全体をおおったまさしく黒船群を作っていたのである。この技は江戸幕府の鎖国政策とともに断絶されてしまったのである。

せいぜい木造の屋形船しか見たことのない漁夫が、夜明の薄明りの中で黒船をみて、伊豆の大島が流れついたのではと驚いたという話が伝わっている。ここに一つの狂歌がある。

泰平の <sup>ネムリ</sup>夢をさます 蒸気船 (=上七五撰)

たった四杯で 夜もねむれず

黒船到着との情報で、天下の一大事とばかりに慌てふためく江戸の情景を皮肉ったものである。ここで若干の蛇足的解説を。蒸気船にかけた上<sup>アツ</sup>呉撰とは高級の茶の銘柄の呉撰である。当時は船も飲食物も同じく一パイ・二ハイと数えたので、上等の茶を四杯ものんで＝黒船が四隻も来たのでねむれないというわけである。

和歌とペアにされる俳句の存在と同関係にある上記の狂歌に対する川柳がある。

武具馬具屋 そつとアメリカ 様といい

天下泰平で、これまで振りむきもされなかった＝買手もつかなかった店<sup>タナ</sup>ざらしの武具馬具がアメリカの黒船が来たおかげで侍が買に来てくれて、久しぶりに<sup>アキナイ</sup>商ができたというわけである。庶民の目は実に鋭いと驚くばかりである。店主のホクホク顔が見えてくるようだ。

とまれこのような江戸市中の文化ショックをよそに着々としかも強引にアメリカは外交的成果をあげた。翌嘉永7年には和親条約を締結し、安政5＝1858年には通商条約の締結に成功して日本をして完全に開国させたのである。この通商条約によっていよいよ安政6年6月2日をもって開港日と決定された。

開港するということは貿易・交易を行うということであって、このことの当然の結果として日本貨幣の両とアメリカのそのドルとの交換価値比率の決定が必要となる。本格的には和親条約によって安政3年8月に初代駐日アメリカ総領事として着任のハリス T.Harris と幕府当局との間で交渉が行なわれるのだが、事実上ではそれよりも早く着手された。

というのも、通商条約締結に先立つ5年前に、その前段階というか手がかりとして、これまでの国是による鎖国政策にもとづく外国船打払い令＝砲撃をうけることもなく、平和裡にアメリカ船は日本に入港でき、その地で<sup>ニワトリ</sup>鶏・<sup>アヒル</sup>家鴨・卵や野菜等の生鮮食料品や飲料水そして燃料等の品々の供給をうけることを承認する和親条約が締結されていたことを思い出してほしい。

もとより特例の第一号としてペリー艦隊が同上の物品類を入手したのだが、

もとより紳士国として自分の評価にもとづく代価を自国の貨幣たる金・銀・銅のコインで支払ったことは当然である。アメリカ艦隊から受取ったこのコインは、早速に江戸の金座・銀座で分折・精査されたのである。

アメリカ艦隊側が支払った銀貨は当時太平洋側諸国＝アジア諸国に広く流通していたメキシコ・ドル銀貨ということだった。これらの平均値を求めて以下の結果を得た。メキシコ・ドル銀貨（＝1ドル）の量目・7.12 匁、品位  $865/1000=6.16$  匁。この純分量を含む天保丁銀の量目は 16.016 匁に相当する。したがって公定相場の金 1 両＝丁銀 60 匁から、メキシコ銀貨の天保丁銀で 16.016 匁相当とされるものを 15 匁相当と見做<sup>ミナシ</sup>て金一分にあたるものと断じた。これから 1 両＝\$4 との交換比率が算定された。

ここでアメリカ軍人とても人の子であるということを物語るホホ笑ましい——筆者にはそう思えるのだが——エピソードを紹介しておこう。日本側の両\$交換比率の算定基準になったものは既述のようにペリー艦隊から入手した銀貨群である。そしてそれらの平均値が 7.12 匁、品位 865/1000 だった。ところががである。貨幣に関する文献によると、正規のメキシコドル銀貨の量目は 7.2 匁、品位 898/1000 なのだ。

そこで神の子ならぬ人の子のアメリカ軍人の登場となるのだが、本国に居た時にグレシャム法則の作動によって掴<sup>ツカ</sup>まされた悪貨または同類のものとしての悪質なドル銀貨（ペルードル、チリドル、ニカラガドル貨等）を旅の恥はかき捨てとばかりに、逆にグレシャム法則に乗って日本側に一括して支払にあてたのではなかろうかと推測される。

とまれ嘉永7年5月に日米会談がもたれ、その席上で日本側より算定した 1 両＝\$4 の比価が提案されたのである。アメリカ側の驚いたのは間違いのないところである。当地の常識水準では白色人種の常として、アジア人を非文化人として見下げていたとはいえ、中国人を知っていたものの、日本は中国人に毛の生えたほどのとは逆の 3 本の毛——誠にツマラヌ駄洒落<sup>ダジャレ</sup>だが——が足らんぐらいと評価していたと思えるものの、そのような人間から論理の通った算定数値

が短期間のうちに計算されたなどとはと、まさに驚天動地——一寸大袈裟かな!?——の驚きだったものと思える。会談に出席の海軍会計士官はこの提案を承認した。ここに1両=\$4, 1両=¥1として¥1=\$4の時代が短期間だったとはいえ、ともかくあったということである。\$1=¥4の逆でないことにとくと留意ありたいのである!!

理論的にはどうであれ、客観的にメキシコ・ドル銀貨に等値とされる一分銀(天保)は誰の目にも小さい=貧弱で、到底等値とは思えず、アンバランス感を生じるものだった。このことを知ったためと思えるのだが、アメリカ艦隊側からこの比価率の改訂が申込まれることになった。ただし彼等は乗船の身であって与えられた次の任務を果たすべく離日しなければならないことを告げて去っていった。残された課題たるこの改訂作業交渉を任務の一つとして日本に来たのが上述の初代駐日総領事としてのハリスだったのである。

## II 両：\$交渉

ハリスは日本着任早々の安政3年8月に、物事は最初が大切だとばかりに領事館運営に必要な銀貨\$500を同量の一分銀と交換してほしいと申込んだ。これは当局によって拒否されたのだが、実はこれには日米貨幣交渉におけるハリス=米案がみえるのである。

改めてハリス案を見てみよう。彼の案は理論的根拠は無視?しての、既に指摘したように客観的=誰の目にも明白な一分銀とメキシコ・ドル銀貨——以下洋銀——との関係事実から出てくる感情に訴えるという方法に頼るのである。要するに天保一分銀の量目は2.3匁にすぎず、品位が純銀にも近い0.989であるといっても、逆に品位はそれよりも低いとはいえども量目7.2匁もあるメキシコ・ドル銀貨に等価とはおかしいではないか?無理がそこにはあるというのである。

これ亦既に述べておいたことであるが、天保一分銀は明和南鐐二朱判系コイン<sup>モマタ</sup>の成果=結晶であるものの明和南鐐同様に事実上 de facto の補助貨幣であって、金貨=天保小判を媒介してその評価=レートは正しいものであった。ただ

し当局はこれまでの対庶民態度＝意識のままにその法的処置＝de jure の手続を全くしなかった。ハリスはまさにこの点をついたのである。一分銀の補助貨幣としての事実上と形式上の、あるいは実質上と名目上との矛盾＝タテマエとホンネの不一致、つまり de facto としての補助貨幣のみあって de jure としての本位貨幣という法制上の規定を伴わない、まさに片手落ちの事態をハリスが見つけて批判の手を突込んできたわけである。

他方でハリスは以下の思考をめぐらした。彼がその昔一貿易商として中国に居たことも関連がありそうなのだが、銀 1 両<sup>テール</sup>とは銀 10 匁<sup>フ</sup>のことである。1 分<sup>フ</sup>は 1 両<sup>リョウ</sup>の 1/4 である。したがって——漢字の両は全く同じでも中国のテールと日本のリョウとは全く別物なのに、彼の論理の成立は生半可な彼の知識を自分本位の都合の解釈をしたまでのことである。とはいえ彼が交渉相手のアメリカ代表だけに解決を困難にしてしまった——彼の身勝手な計算によれば 1 分<sup>フ</sup>＝10/4 匁＝2.5 匁となる。これは一分銀の量目 2.3 匁に近似であることから、この計算には正当性を与えねばならないとしたのである。同文の両を都合よくテールとリョウに使われているという不正の自覚すらもないままに。

かくてハリスはアメリカ側の主張をまとめた。1 分<sup>フ</sup>は 1/4 両（リョウ）であり銀 1 両（テール）の価格は \$1.36 であるところから、1 分<sup>フ</sup>＝\$1.36/4＝\$0.34 になるべきだ。したがって日本案のように一分銀＝\$1 ではなくて三分＝\$1 なのだというのである。自分の不正など露もありはしないという確信を彼が持っているだけに始末<sup>オ</sup>に負えないことになる。

ハリスはこの論理的にも正しいと確信する自己本位の一応の結論から、更に非論理的とも思える実は無茶な次の主張＝結論を引出す。彼我の銀貨は銀貨<sup>ドウシ</sup>同士・金貨は金貨同士、一切の差＝品位を無視して同種同量の原則によって機械的にとでも表現したくなる方法で交換＝両替しようと提案してきたのである。

因みにこの提案によって、品位無視という無茶さ加減によって、アメリカ金貨に比して品位の悪い小判は自動的に当初からアメリカ側によって問題外のものとして排除され、銀貨が貨幣交渉の対象になるのである。

ハリスは絶対視している同種同量の原則によ交換を更に精密にするために、①日常的には\$1（銀）＝三分（一分銀3枚）であるが、②正規には\$100＝一分銀311枚との規定を加えた。これこそが真の同種同量交換のレートだというのである。

交渉の過程ではいろいろの見当違いの主張も出たのだが、その一つを例示しておこう。ハリスの主張を客観的に考察すれば\$1銀貨7.2匁＝一分銀2.3匁×3＝6.9匁との不等が明白である。この差の0.3匁については、ハリスは浩然としてアメリカにとって不利な0.3匁は日本側へのサービス・オマケだから取っておいてくれと本心から述べて恩に着せたのである。真実は逆なのである。純分で\$1銀の6.5匁に対し一分銀の6.8匁であって0.3匁だけアメリカ側がとくをするのである、品位無視という横車の当然の結果である。それだけではない。既述のように日本の銀貨には必ず混入されている2/1000の金が一分銀にも当然ふくまれているのである。恩をきせるべきなのは逆に日本側なのだが、それを知らず、知りえなかったこのハリスのような人間を幸運な男とでもいうのだろうか。

一方日本側の交渉委員の選択も〇〇家の出身者だという旧意識の門閥によってしたので、貨幣知識皆無の者ばかりで、日本貨幣の常識をハリスに教示すればそれ相当の反応も期待可能だったのに、その要素すらなかったという次第だった。更に加うるに顔を真紅にするハリスの問答無用とばかりの再々におよぶ恫喝・圧力もあって、安政3年9月には同種同量原則という世界的珍事<sup>チン</sup>＝椿事<sup>チン</sup>ともいえるものの承認・成立をみたのである。

この問題に対してはネーベンなものといえるが、同時併行して交換における改鑄費の検当がなされた。当初日本側は改鑄費を両替額の25%と主張し、ハリスは国際的に見てもそんな高率のものはないと5%を主張した。いつまでも主張が併行線をゆくので、ハリスが折れて6%で妥協を見た。ところが、外国人＝異人の手に吾々の貨幣が渡るのはケガラワしいとて、同種同量交換原則ではなくて同種同量通用ということでドル貨のままでの通用を認めることになり、苦

心して手にした改鑄費徴収権も行使なしと断じ、その放棄をハリスに伝えた。この時ハリスは狐にツママレタ!!のような心境になったという。安政4年12月のことである。ただし慣れるために開港後1年間は両替することになった。もとより改鑄費は不問＝無しということである。このチグハグの対応は交渉委員人選の門閥主義の当然の結果であることは明白である。

### Ⅲ 二人タダノリ

わが国の武将＝支配階級の人物には、その姓と名の間に形式的＝一応の任地名・支配地名を入れる習慣がある。柳生タジマノカミムネノリ但馬守宗矩というように。横道に外れるが、大岡越前守忠相の名裁判官ぶりを誇張するための落語を思い出したのである。庶民が武士と同様に〇〇守カミと名乗らせて欲しいと申し出たのに対し、「承知した。ただしその場合絶対に「ノ」を入れずに漢字のみを発音せよ」と命じたのである。早速庶民が相互に山城守とか摂津守とかとなえ合ったが、やがてそれが美濃守＝美濃紙に通じることがわかり、願い下げを申し出たというのである。お粗末の一幕!!

因にこの〇〇〇守ノカミが日本語ボキャブラリィに取り入れられた特殊用法は肥後守である。もとより会津松平家祖の保科肥後守正之等数多くの武将がいるもののその代表的人物といえ加藤清正なのだが、ここにいう肥後守とは戦前に普及した学生用小刀——鉛筆等を削る文房具——で、同型大の鉄製の鞘に打込みにされていた。ただし産地はその名称とは無関係の兵庫県是三木市である——熊本といきたいところだが。

同類のボキャブラリーであって周知に近い陰語となっているものに薩摩守サツマノカミがある。この語は平薩摩守忠度の名の忠度＝只乗・更にはキセル乗車を意味するようになった。川柳にも

相棒は 薩摩守を 追かける

とあるように、この用法はすでに江戸時代に普及していた。茶店の主人に教えられた旅の僧が、それを実行して「平家の公達薩摩守キンダチタダノリ」との句を告げ、

カンザキ

ワタ

神崎川の渡しは無賃渡河をはかって失敗するという狂言「薩摩守」によって隠語としての薩摩守を根付かせたものと思われる。

平忠度は清盛の弟であって武将として有名だった。それ以上に有名なのは『平家物語』にも出てくるエピソードであって、これによって彼は単なる武骨人ではなくて文武両道にすぐれた人物であるとがわかる。それは有名すぎるものであるが、順序にしたがって紹介しておきたい。

謡曲「忠度」にも「年は寿永<sup>ジュエイ</sup>の秋の頃、都を出でし時なれば、さも忙はしかりし身の、心の花か蘭菊の、狐川より引き返し」とあるように、福原さしての平家一門の都落ちの中から7人の従者を伴った平忠度は京都へ逆戻りしてきた。五条通り（現松原通り）烏丸東入ル俊成町にあった藤原俊成邸を目指してである。一説によると同宅は京極（現寺町）通五条（現松原）上ルにあったという。

俊成といえば当代切って歌人である。さすればと忠度は考える、「世しずまり候ひなば、（俊成に対して）勅選の御沙汰候はんずらむ」と。そこで「一首なりとも御恩を蒙って」と鎧<sup>ヨロイ</sup>の引合から家集一卷を俊成に託すのである。

世も静まり文治3=1187年に俊成が『勅撰千載和歌集』を編集するに当り忠度の一首を撰出した。但し彼が勅勘の身であることを考えて、「読人知らず」として彼の「故郷花<sup>コキョウノハナ</sup>」と題する一首を採用して忠度にこたえた。

ささ浪や 志賀の都は あれにしを

むかしながらの 山さくらかな

これである。

このエピソードを前提にして世阿弥が二番目物・春として作ったものこそこの「忠度」なのである。俊成の弟子が西国行脚<sup>アンギャ</sup>の途中、旅寝すると忠度の亡霊が現われ、勅勘ゆえに読み人しらずで一首入撰しているのを悲しみ、妄執変じて亡魂となって旅人にからむのである。「然るべく作者をつけてよび給へ」。しかし俊成はなくなっており、子の定家に頼んでくれと哀願する。そして一谷<sup>イチノタニ</sup>で戦死したので回向をたのむという次第である。

岩波文庫『三好達治随筆集』に「(母音の) 温感」と題する一文がおさめられ



ている。彼によると、AOの音はともになんともなく鷹揚で暖かく情緒的である。Uはその度は減じるが、その代りにやわらかくおだやかである。EとIとは鋭くて冷めたく理知的であるという。これを忠度の和歌に適用すると、母音Aは18/31、他にOは3でUは1、したがって

$A18+O3+U1=22/31$ となる。かくて三好はAだけでも花やかで伸びやかであって、テーマの廃都への淋しい思いとが逆行的に表裏一体化して一層哀れの深い効果を生んでいるという。

実に心のあたたまるAO型!!のエッセーを献じてもらったのであるから、忠度ももって瞑すべきで、完全成仏<sup>ジョウブツ</sup>して極楽へおもむかれんことを願う。大変長すぎる助走になってしまった。ここでいよいよハリスを中心とする欧米外交官に押れ放しの貨幣会談に一矢をむくいた人物の登場となる。その名は文字こそ違え同じタダノリである水野筑後守忠徳この人である。彼は余りにも忠告魔ともいうか直言居士<sup>コジ</sup>すぎて不遇だった。しばしば左遷のうき目にあうも、大事な時には必要人物として必ず担ぎ出されるという人物だった。それほどの、特に貨幣問題のキレ者だった。

#### IV 勘定奉行・外国奉行＝財務省・外務省

水野忠徳は安政元年12月から同4年12月まで勘定奉行だった。安政4年5月に長崎奉行兼勘定奉行として長崎におもむいた。オランダとロシアとの和親条約追加条約締結のためにである。同時にギルダー（オランダ貨幣）とルーブル（ロシア貨幣）銀貨に対し洋銀——メキシコ・ドル銀貨や上記の銀貨等を一括しての呼称——1枚＝銀15匁＝一分というレートの設定に成功した。なぜ長崎での彼の行動を書くのかというと以下の背景があるからである。

彼の貨幣理論は現在の経済学等の視点からしても正しいのであるが、実は前節末で紹介したように左遷同様に彼を長崎に追いやった中央の江戸では門閥主義による人選で日本側の貨幣委員になった連中が、ハリス等に洋銀＝\$1銀貨＝三分のレートを承認して、これを通商条約に明記することになった。この段階

にたちいたってようやく事の重大さに気づくことになる。そこで自分の不勉強を棚上げしてオットリ刀で水野を江戸に呼びもどしたのである。そして急拠初代の外国奉行（安政5年7月——安政6年8月）にかつぎ出されるのである。

平忠度は和歌のために都＝中央に引帰ったのだが、水野忠徳は無能ゆえのレート承認にもとづく危機回避のために交渉の第一線に立たねばならぬ外国奉行として江戸＝中央に引帰らされたのである。この自発的と無理強い・積極と消極というこの落差よ!!。

このようなわけで中央たる江戸に戻ってきた水野を待ち受けていたものは同種同量原則による交換の生む諸問題であって、ここでは衆目の認めるように指導的理論家として大活躍を果たした。いつの世にも救世主のように貨幣無知の官僚群のなかにあって貨幣理論に通じる人物が出現するものであって、実に不可思議な現象といわなくてはならない。

水野が先ず手をつけたのは、一つには問題整理と一つにはより多くの若手官僚に貨幣問題に理解をもたせるためもあって、安政5年6月から本格的に勘定奉行（＝大蔵省・現財務省）と外国奉行（＝外務省）との間で同種同量原則による貨幣問題を討論させた。その結果として浮き彫りになった問題点は日本からの金大流出ということだった。そのメカニズムは以下の通りである。

同種同量原則交換をそのまま適用すると、日本において成立する金銀比価は凡そ1:5となる。即ち天保小判の量目2.3匁・品位568/1000、したがって純分は1.7匁となる。他方実質的補助貨幣の天保一分銀の量目2.3匁・品位0.989＝純銀2.27匁×4＝9.08匁≒9.1匁。かくて純金の1.7匁と純銀の9.1匁から欧米人によって問答無用とばかりに凡そ1:5との数値が事実上の金銀比価として認定される恐れのあることがわかった。

贅言無用なのだが、天保一分銀は法的 de jure 手続きこそとられなかったが、実質的補助貨幣であるので、それと本位貨幣たる天保小判との間に金銀比価など成立するものではない。それはあくまで似而非比価なのである。では当局は一体全体、正規の比価としてどのような数値をもっていたのであろうか。なぜ

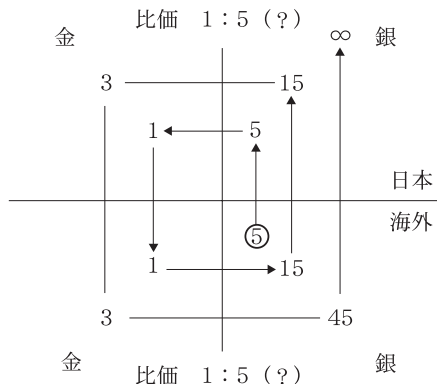
か歴史研究者は注目しないのであるが、公文書のなかに以下の記述が見出される。「金凡そ3匁の量目は銀37匁の量目に対し通用す」これである。ここから1:12.3の比価が導き出される。

あるいはペリー艦隊の会計官に当局が提示し一応のOKをとった日本側の論理の通ったレートによれば、天保小両1両＝洋銀4枚(\$)であり、ここから以下の結果が得られる。天保金1両＝金1.7匁+銀1.3匁である。これに対する洋銀＝6.16匁×4＝24.64匁－1.3匁(天保金の銀量)＝23.34匁。かくて天保金1.7匁と洋銀4枚の23.34匁から1:13.7という比価数値をうる。但し、この洋銀が既述のように量目7.12匁の悪貨洋銀であり、もしも正規の7.2匁のものであれば、それは1:14.5となる。その純分が6.48匁だからである。

とまれ欧米側に勝手に認定されるだろう日本比価の1:5に対して、当時の国際的比価はといえば凡そ1:15であった。この両者数値の格差から明確に予測されるものは、次のメカニズム＝図による日本からの金大流出ということである。

まず図の説明からはじめる。図面は四等分され、上半分は日本であり、下半分は海外・具体的にいうと金銀市場のある地、例えば中国の上海や広州などということになる。次いで右半分は銀・左半分は金を取扱う。したがって図面の右上の四角は日本における流入する海外からの銀の動きが示されることになる。図における行動は丸印しの銀5単位を示す右下の四角面の海外から日本に持込まれる⑤から始まる。

もう一つ留意願いたいことは、1:5の比価があるとはいえ、これが自動的機械的に作動



するわけのものではないということである。当局が責任をもって持込まれた洋銀を天保金にしてくれるのではないということである。具体的に述べると、暗躍した小判買い商人とよばれる人物から外国商人等は自己責任で洋銀と天保金とを両替しなければならないので、小判蒐集を認めない当局からの処罰への保険料も加味されて天保金価格は上昇し、ために計算上の収益率は1/3に減じ凡そ100%——それでも——前後だったということを申しそえなくてはならない。

## V 秘策

水野忠徳を中心として行なわれた勘定奉行（＝財務省）・外国奉行（＝外務省）との合同研究の結果として明白になったことは、このままでは日本から大量の金が海外に流出してしまうということであった。このことを知った以上はこれを放置しておくことはできない。かく考えた水野は全知全能を絞って貨幣理論家の権威・第一人者としてそれを防止する方法にしばし思考をめぐらすことになる。その結果として海外への金大流出を阻止する一つの秘策が浮び上りその具体化に動いた。その成果が安政二朱銀とよばれる銀貨なのである。

明白な金海外大流出を阻止するための水野忠徳がこめた秘策の具体物としての安政二朱銀は、安政6年6月2日の開港日にむけ、同年5月24日から製造をはじめた。その具体的内容は次の通り。

安政二朱銀 量目 3.6 匁・品位 850/1000 同銀貨よりも小さく軽い天保一分銀（量目 2.3 匁）に比しその半額にしか通用しないその大きく重い図体という点に着目した江戸市民はこれをバカ二朱とよんだ。実体はまさに左様であっても、そこにはそれを耳に目にした人々の心に残りつかむようなユーモア・ウィット・エスプリのひとかけらもない。そのような性格をもつ新造語能力は日本語＝日本文化の元祖・家元たる上方とも関西ともよばれる地域住民に比すべくもない。せめて<sup>ヒルアンドン</sup>昼行燈なみのニックネームをつけてほしかった。

しかし現実においては昼行燈とよばれた大石義雄が快拳をなしとげたのと同様に、このバカ二朱もその名とは反対に、非一流文化人視して日本人の<sup>タカ</sup>高を<sup>クク</sup>括っ

ていた欧米の外交団をまさに驚天動地・肝を冷やさせ、それだけに逆に激怒に狂わせるという偉力を遺憾なく発揮したのである。

実はバカ二朱には更に小細工がほどこされていた。公称品位は 850 だったが実際には 847.6 だった。安政二朱銀の量目は 3.6 匁故に洋銀 1 枚 (\$) 7.2 匁 = 二朱銀  $\times 2 = 7.2$  匁 = 一分となる。かくて強引に承認させられた洋銀 = 三分が幕府元案の金一両 = \$4。∴ 洋銀 1 枚 = 一分に回復することになる。

二朱銀と同時に改鑄された安政小判・量目 2.4 匁・品位 550 = 純分 1.32 匁。この純分量と二朱銀の一兩分の純分量 24.88 匁との間には 1 : 18 の比価が成立して金の海外流出の恐れはなくなった。それだけではない。前段文頭で水野が小細工して二朱銀の実際の品位を 847.6 にしたことが偉力を見せつけるのである。洋銀の純分 6.48 匁から二朱銀の実際品位 847.6 による 2 枚分の純分 6.1 匁を差引くと 0.38 匁の数値となる。これはほぼ洋銀純分量の 6% に当る!!。ほかでもない、当局が交渉で放棄した筈の改鑄費ではないか!!。しかも貨幣素材ではなくて純銀で両替の度に自動的に日本に入るというのである。

安政二朱銀にはこのようなシステムが背負われていたのだが、このことは外部にもれることもなく必要量の製造も達成され、いよいよ開港日を迎えることになった。

二朱銀にこのような秘策がこめられているとは露しらぬ欧米商人・外交団は、同種同量原則交換によって三分の日本通貨を入手したものとばかりに信じ切っていた。ところがこれで日本商品を購入しようとして、その購買力の低さに驚き二<sup>ニシユ</sup>朱をニセ = 偽と耳にしてニセ金だと騒いだりもした。しかしこれは本格的反動の序曲にすぎなかった。文字通り驚異のドン底に落された欧米商人・外交団は国際的にも珍らしい猛反撃を展開した。その集中的反撃は米英仏の一丸となる外交官である。

もとより南米大陸でインカ帝国での非人道的残虐の限りをつくしたスペイン人達に比すれば全く紳士的であるものの、黄色人を正統人間とは認めない心情の外交団はカサにかかって「吾々の無許可で製造された貨幣は貨幣ではない。

したがって無効だ」と一方的に宣告したのである。ということは独立国＝主権国家の造幣大権がおかされ未開国扱いにされたという事である。一昔も二昔も前のことになるが、昭和 21＝1946 年の占領下の日本がインフレ対策にと千円・五百円の高額日本銀行券を作ろうとしたが G.H.Q（占領軍総司令部＝マッカーサー）から不許可になった。日本が占領下の国だったからである。しかしこの安政の事件は決して占領下の日本ではなくて独立国の日本の白日のもとで堂々と展開されたのである。これこそ真に驚くべきことではある。

かくて水野忠徳が金大流出の阻止のための秘策をもちこんだ切角の二朱銀も極めて短命に終わってしまい、現在その稀少性は古銭屋の高価格に反映されている。二朱銀のこの運命を知ると、その結果がどうなるのかということは明白になる。城の外堀ソトボリのことを総堀と思っていた大坂方＝豊臣方を無視して文字通りに外堀も内堀ウツボリも埋めて裸城にして家康は豊臣秀頼を亡ぼしたと小学生時に教えられたことがあるが、これに似て金流出阻止の肝腎の防禦線がなくなったのだから金は低きにつく水の様に必然的に海外流出となる。

ここで余り知られていない面白いエピソードを紹介しておこう。登場人物はこれによって権威に弱い、しかしバカのつくほどの正直にして気の弱い人柄を反映するものであることもわかる。その人物とは新任のイギリス駐日公使のオールコック R.Alcock である。彼はつねにハリスに同調し、彼の尻馬に乗って彼以上に交渉に出ている幕府官僚を恫喝し、二朱銀を無効として拒否するのみならず、ハリス案の同種同量原則交換を正当なものとした。ところが恩賜休暇で一時帰国した折に、イギリスの貨幣問題の権威とされていたアーブスノット G.Arbutnot がイギリスの大蔵大臣に提出のリポートで、日米貨幣交渉において示された日本側の主張、\$1＝一分・\$4＝一両は正しいとする見解を知って驚くとともに、彼は幕府がもしも自己見解をまげることなく押し通していたならば金大流出という貨幣的混乱も発生しなかっただろうにと、都合のよいというか、イイ子ぶった感想をのべている。彼をもふくむ恫喝専門の米英仏外交団のもとでそんなことが可能とでもいうのだろうか（オールコック『大君の都』）。

要するに彼の書き上げた『大君の都』は何故か前部と後部に矛盾を含む首尾一貫しない内容のものである。

## VI 八方破れ

前節において展開した諸事情の結果として、必然的に発生した金の海外流出は一体全体どれほどのものだったというのであろうか。これまでに公表されたもので最高は2千万両説で最低は1万両説である。私見は50万両であり畏友藤野正三郎は820～860万両とする。これらの数値は記録らしきもの皆無であるので、あたかも<sup>セリ</sup>糶市場における入札＝かけ声に似ていなくもない。もとより科学性をもたせるべく私見は両替に必要な一分銀の存在量とその回転速度を考え、藤野は流出先の文献等にも配慮はしているが。

要するに正確なことはわからないものの、後述するようにとにかく幕府の生命取り＝邸宅の柱が<sup>シラアリ</sup>白蟻にくわれてしまったように自然崩解然同様になる出血だったことは明白なことである。

この天然＝自然ならぬ突然に湧いてでた人工的ゴールド・ラッシュは、そもそも通商条約締結の目的たる開港場における正規貿易の実現には程遠く、というよりは、それと全く無関係の現象が展開されていた。「情報はカネになる」という言葉を耳にしたことがあるが、文字通りの「開港場に銀を持込みさえすればカネ儲けができる」との情報は「悪事千里」どころか万里を走って米英仏を中心とする西欧人が集まって日本から金をドンドンと持出したのである。こんなエピソードまである。条約締結の日本使節を渡米させるための軍艦の乗組員までが、乗組員をやめてまで金儲けのために開港場に行ってしまう、その軍艦の予定日出航が不可能になって出航そのものが大幅におくれた。

開港場における事態の推移を見ていた欧米外交団は、そのアブノーマルをノーマルに改める方法として日本側に親切ごかしにもその方法を提示してきた。

開港場にみられるアブノーマル事態をノーマルな貿易活動にするためには、日本の金貨＝小判は銀貨＝一分銀の3倍の価値がある。したがってこれを是正



するが必要である。このために

(A) 銀＝一分銀を所与として金貨の純分を 1/3 に減らす

(B) 金＝小判を所与として銀貨の銀量を 3 倍に増<sup>フヤ</sup>す

の (A) (B) のいずれかの案の採用を求めた。これは日本がイギリスに次いで世界で 2 番目に実現したと既述したように、実質的金本位制度の両本位制度への逆行を勧告するものである。

今になってこんなことを云われなくっても、当方は百も知っている。日米貨幣交渉で散々そのことを説明したではないのか。こんなアンバランスを作ったのは何処の誰なのかと鼻しらむ思いで当局は聞いていたに違いない。この時なぜ堂々とこのことをハリス等の米欧外交団に伝えなかったのだろうか。残念なことである。もとより彼等には貸す耳をもっていなかったらうと思える。

容易に予測できるように A 案が採択された。というのは当局は減らす＝新たな支出なしはまだしも少しでも増やす＝出すのは現状では絶対に避けるべしと考えていたからである。

A 案によって万延元＝1860 年に製造されたのが万延金である。

万延小判 量目 0.88 匁・品位 572.5・純分 0.5 匁

量目で 1 匁を切る金貨はこれが最初で最後であるが、幕府の懐具合をダイレクトに反映するものである。先代の天保金の 1/3 の大きさのために誰の目にも貧弱・貧相に見えた。このために世人は憐憫の情をかけ、逆発想で可愛いものと解<sup>ヒナ</sup>し、雛小判とよんだ。これが転じて姫小判とも称したともいう。

万延金の出現によって金銀比価は 1：15.74 となり流出の心配はなくなった。当局は万延金の製造と同時に所有金の有効活用と実用面の両方から、万延金を改悪鑄した万延二分判をも同時に製造した。

万延二分判 量目 0.8 匁・品位 228・純分 0.1824 匁——一両分 0.3648 匁

この量目 0.8 匁は万延金の 0.88 匁と対比しても優劣はないのと同然で、上述のように実用面にウエイトを置いて四角い小判として流通の中心にしようと考えたようである。万延小判の製造量の 66.6 万両に対し二分判は 4894 万両であっ



て、なんと小判の75倍という記録を更新するものだったからである。万延小判は飾りもので財界活動は二分判でという両者の組みあわせだったといえる。この実用的理由とともにたとえ幕府の面目にかけても天保金なみの復活金貨を製造しようにも出来なかったという人工的ゴールドラッシュの物凄さの結果という理由が考えられる。

これらの理由以外のものとして歴代改悪鑄でお馴染みの出目入手というものが考えられるだろうが、今回はそれがなかったという。先ず第1に、改悪鑄を前提にして良貨を流通界から蒐集するいとまが今回は全くなかったこと。第2に出目を生む良貨を持っている所有者にそれを手放させるためには、その誘因となる割増金をつける必要がある。例えば文久元＝1861年4月の告示によれば安政二分判百両につき金三分をつけるという。この方法による良貨入手は時間の経過とともに割増金の%の上昇によってのみ有効だった。第3に実務にたずさわる両替商の場合も同然であって、彼等への手当金の%も時とともに上昇したので、要するに江戸貨幣史上珍らしく出目に見放されたものは万延金ということになる。

もしもその後幕府が金銀の入手に成功したのなら、既述のように新井白石や将軍吉宗のひそみにならって、もう一度良貨の製造を幕府の權威回復のためにも実行したかもしれないと思われるが、事実はそれを拒否するほどまでに実に冷酷そのものであった。

(イ) <sup>ゲンジ</sup>元治元＝1864年・慶応元＝1865年の2回の幕府による長州征伐のための失費。

(ロ) 文久元年に勃発した水戸浪士によるイギリス公使館襲撃＝東禅寺事件によっての賠償金£1万の支払い。

(ハ) 文久2年の島津久光の行列を横切ったイギリス人を切った生麦事件の賠償金£10万の支払い。

(ニ) 文久3年の長州藩によって起された下関事件による賠償金\$三百万の支払い。

ただしこの\$三百万という金額についてはコメントが必要である。下関事件の当事者である米仏蘭に英を加えた四ヶ国は、一致して日本に提示した開港の選択肢をとるように仕向けるために、陽導作戦としてあえて賠償金を異常なほどに巨額にしたのだった。ところが欧米人の常識的感覚・予測は物の見事に外れたのである。幕府はマサカと思っていた異常巨額の賠償金支払いの方を選択した。ただし巨額であるだけに幕府はニコスカード?!ならぬ6回分割払いを申し出、それが認められた。かくて幕府は3回分を支払って崩解してしまった。江戸幕府に変わって政権を手にした薩長を中核にする明治新政権が残りの3回分を完済するのである。要するにこのようにその後の幕府にとっては金銀が流出しこそすれ入手することはなかったのである。

話柄を再び本筋——万延小判・同二分判の段階にもどす。1両あたりの純分に落差があり、総製造量に75倍の差のある金貨が同時に流通界に登場するのであるから、当然ながらグレシャムの法則が作動する。したがって流通過程は悪貨の二分判の天下になって小判は流通界に姿を見せなかった。当局が新任外交官に日本の金貨を見せようとしたが、当局の力をもってしても仲々小判を入手しえなかったというエピソードが伝えられている。

このようなわけで商品の価格＝物価は、通常は小判との関係によって決まるのだが、その中核金貨たる小判がなくて、やむをえず二分判を価値尺度とすることによって価格がたてられることになった。これを有合建て<sup>アリアイ</sup>という。この点二分判は四角い小判として製造されたようなものであるから、市場には不都合なことは起らなかった。

上記賠償金の支払いや更にあらたに幕府の軍隊の近代化や造船所の建設等の出費もあって益々財政苦におちいった。経済的窮乏・破産を以前に筆者は殿堂の柱を食べる白蟻にたとえたが、幕府の殿堂はそのすべてを白蟻に食べられており、その政治的破産よりは殿堂そのものの崩解は1年早かったというのが実情といえるのではなからうか。

## VII 貨政的浮沈

貨政面における幕府の各藩等＝臣下に対してもつプライド・優越感<sup>サツ</sup>は札＝ペーパー・マネーは出したことはなく、開府時に比して質量は落ちたりとはいえ、とにかく金銀の正貨を製造・発行しているということにあった。——唯一の例外を除いて。

その例外とは何か。実は開府以来、最初にして最後のそのペーパー・マネーである三種を発行した。江戸横浜通用金札・兵庫開港金札・関八州通用札これである。慶応3年8月である。もとよりこれらの紙札は財政破綻を告げるものである＝白蟻が柱の表面を残してほぼ食べつくしたため殿堂の瓦や土の重みに耐えかねて突然に崩れるように幕府も自壊化したのである。

この三札は流通することなく終わってしまったが、ここでつけ加えておきたいことがある。文脈を素直にたどれば紙幣＝札を出すことは不名誉なことだと理解されるのではなかろうか。しかしこれはあくまでも幕府当局の気持をおしはかって書いたまでのことであり、これは筆者の考えではない。というよりは硬貨よりは紙幣の方が一般的に便利であり安全でもあると思っている。その点中国の元王朝の貨政に教えられることが多い。

中国の歴代王朝からみれば元王朝は異民族で日常活動・生活が異り、中国の歴代王朝の農本主義＝重農主義に対し重商主義という点で際立っている。ただし異民族王朝の清王朝は特殊であって漢民族王朝と同じく農本主義国だった。

農業を嫌って商業を好んだ元——騎馬生活が基本だったからであろうか——は交易・物流をはかるべく、そのための貨幣制度として紙幣——交鈔を発行し、これをもって一本槍といわんばかりに押し通した。

紙幣流通にとって生命となるものは、その信用＝価値保証の完全確立であることは云うまでもない。このために元大帝国を数ブロックにわけ、その一経済ブロック毎に、即ち元帝国各地に国立中央銀行たる平準庫を設置した。そこには銀1万2千錠が備蓄されていて恒常的に紙幣と銀との兌換<sup>ダカン</sup>＝交換に応じる銀

本位制度が制定されていた。

これを子母相權<sup>シボ</sup>という。子母錢とは子＝利子・母＝元金であるのと同様に、この場合の子＝紙幣・母＝銀であり、相權とは權衡＝バランスの意である。紙幣と銀とにバランスをとるということである。

完全兌換の通貨としての紙幣は、支配者はもとよりのこと被支配者にとっても現金をもつよりは紙幣の方がより便利で安全である。

ただし子母相權の限りという制約が当然にある。これを失すれば発行紙幣は忽にして悪性インフレ・ハイパーインフレとなって、これが国家の破綻＝亡国に導くのである。

元王のフビライはこの論理を十分にわきまえていた。だからこそその維持＝銀の入手に四苦八苦するのである。歴史的事実として元王朝はこの破綻で亡国に追い込まれるのだが、それは後の話である。子母相權確立のプロセスでフビライは日本が金銀大国とのなによりの情報を耳にするのである。その証拠は1275年にフビライに接し、そこでの見聞を後に『東方見聞録』として書上げたイタリア人マルコ・ポーロのその物語りのなかに金銀大国としての日本が見えるからである。

フビライが金銀大国との日本情報を耳にしたからこそ、子母相權を確保すべく文永11＝1274年・弘安4＝1281年の二回にわたる元寇が発生したわけである。聞くところによると流石に重商主義国だけあって、日本への元の国書には和戦両方の提案があったが、どこで鉦<sup>ボタン</sup>のかけ違いが生じたのか、不幸にも現実には戦争になってしまったようである。フビライは二度の失敗にもめげず、銀の入手に執念をもやして三回目の日本征服＝元寇を計画したのだが、亡国で野望を果すことはなかった。要するに通貨の近代化とは本位貨幣ではなくて子母相權の確保されている紙幣の流通することである。

自説を割りこませて失礼。話柄をもとに戻す。幕府が苦しまぎれとも思える既述の三札は殆んど通用することなく終った。しかしそれとは裏腹に貨幣経済は発展して日本の末端にまで浸透し、その結果として近代への胎動が発生した。信濃

国埴科郡森村（現長野県更埴市森）の住人中條唯七郎が弘化年間＝1844－47年に村民の生活・行動のここ50年間の変化について、『見聞集録』と題して筆まめに記録している（柄木田文明『成蹊論叢』第33号）。そこには「世態<sup>セタイ</sup>の替りゆく事、天地白黒〔の相違〕なり」との表現が見出される。それに示された具体例の若干を述べておこう。これまでなら文盲人無筆人となるべき者も寺和尚の指導で、二三才より素読しはじめ読み書きが可能→識字率上昇→俳句・狂歌・短歌・長唄・茶の湯・生け花をたしなむようになり、そこに近代化意識という精神革命が発生した。

この動きを支える経済に動きは実物経済からの貨幣経済への移行である。矢代<sup>ヤシロ</sup>（屋代）へ薪を賣りに行ってもままならなかったものが、明和安永期＝1764－1780には必ず売れてるのみならず、思わぬものまで貨幣になり、森村だけでも年間三百両を稼いだ。その結果として村に干杏<sup>ホシアンズ</sup>の生産が流行するという始末。かくて実物経済支配の一寒村にも貨幣が流通して「土砂瓦石の如く」それを行使し生活水準も天地黒白の違いのように上昇した。養蚕で他国から貨幣が入りマユから生糸<sup>キイト</sup>をつくり織物にして販売した。その結果として天保6年には長崎にまでゆく人も出、村としての見聞をひろめることになる。幕府が情報を操作すればするほどいろいろのルートを通じて情報が入るようになる。これが幕府崩解の基盤であると同時に日本近代化のそれでもあった。

さて慶応3年10月にいわゆる大政奉還が行なわれ、当局自身<sup>オモワク</sup>の思惑はさておくとして、政権としての幕府は崩解するのだが、その全体としての有機性は失っても、その分子が各地で逆旗<sup>ヒルガエ</sup>を翻して敵対をつづけた。上野戦争・会津戦争・函館戦争等々である。これら戦闘集団の明治2年5月までつづく抗戦を鎮圧するためにも、新たに政権を手にした薩長中心の明治新政権は、即刻貨幣を製造する必要が生じた。しかし金銀と新政権は全く縁がなかった。ここで既述のエピソードが出てくるのである。

再述の海容を願って——西郷・勝の合意で江戸城の無血開城が決定されるや間髪を入れず、城内のすべてを凍結状態にして、イの一番に兵が駆込<sup>カケ</sup>込んだのは御

金蔵である。情報によればそこには一個の分銅金があるという。それを入手するためにである。ところがそこには鑊銭<sup>ビクセン</sup>はおろか、床板には塵ひとなく雑布<sup>ゾウキン</sup>掛けされていたという。

真偽は別としてこんな話を聞いたことがある。新政権は大坂の有力商人の主人かそれ相当の力をもつ番頭に召集をかけ、その集団を軍兵が囲んだ状態で、討幕完成のためには〇〇万両が必要であり、是非とも協力ねがいたいと願望＝命令し、有無云わせずその必要量を入手したという。

とにかく入手した金銀からの貨幣製造を担当したのは新政権の会計官を構成する貨幣司である。それは明治2年2月まで軍資金となる二分判を製造した。一般にこれを明治二分判・貨幣司吹二分判<sup>ブキ</sup>とよんでいる。以下これを幕府の万延二分判と対比しつつその内容を示そう。

明治二分判 量目 0.8 匁・品位 223.4・純分 0.17872 匁

万延二分判 量目 0.8 匁・品位 228.0・純分 0.1824 匁

かくて一両分＝2枚での純分は万延二分判の0.3684匁に対して明治二分判は0.35744匁となる。既述の内情からすれば、新政権は幕府貨幣水準をぬくことは無理であり、実力をそれなりに精一杯に示したものと云えよう。ただし明治二分判には劣悪な偽物が横行したという。これを入手した欧米人が外交問題化し、日本の担当大臣が困り果てて辞任を申し出るという事件までもオマケについたのである。このような事態を避けるためにも反抗勢力を完全に克服してその基礎を固めおえた新政権は、緊急課題の一つとして新政権にふさわしい貨幣制度の確立と貨幣そのものの製造にかからなければならないのであるが、これについては稿を改めて論じることにはしたい。